

Kume Kunitake and Noh's Meiji Era Revival : An Encyclopedic Knowledge and Memory Supporting Iwakura Tomomi

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-02-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 三浦, 裕子 メールアドレス: 所属:
URL	https://mu.repo.nii.ac.jp/records/1390

久米邦武の能楽再興

— 岩倉具視を支えた博覧強記

三 浦 裕 子

はじめに—久米美術館開館三〇周年記念

「久米邦武と能楽展」を廻って

I 現在の能楽界における久米邦武の評価

II オペラとの共通性から能楽の価値を認識した

初期の人物

(1) 成島柳北の場合

(2) 土方久元の場合

(3) 岩倉具視の場合

(4) 久米邦武の場合

III 池内信嘉が岩倉具視説を提唱した理由

(1) 岩倉具視説が虚構である根拠

(2) 池内信嘉が虚構を作り上げた理由と時代背景

(3) 岩倉具視を支える人物に徹した久米邦武

IV 久米邦武の能楽研究

まとめ—久米邦武の能楽界に果たした役割

はじめに—久米美術館開館三〇周年記念

「久米邦武と能楽展」を廻って

佐賀出身の歴史学者である久米邦武は特命全権大使の

岩倉具視率いる使節団の一員として一八七一年（明治

四）から七三年にかけてアメリカとヨーロッパを巡行

し、その報告書『特命全権大使・米欧回覧実記』（以下、

『実記』とする）を著したことで知られている。一方、

能楽研究にも勤しみ多数の論考を執筆したのだが、残念なことに今日の能楽界においてはほとんど忘れ去られてしまった存在と言えよう。今回の公開講座「久米邦武の能楽再興―岩倉具視を支えた博覧強記」の目的のひとつは久米が明治時代の能楽再興に果たした役割を検証するものだが、このようなテーマを選んだ理由を以下に述べたい。

久米邦武と長男の桂一郎を記念して一九八二年（昭和五七）に開設された久米美術館が二〇一二年（平成二四）に三〇周年を迎えた。美術館ではこの記念の年に久米邦武の人物そのものに焦点を当てた展覧会を開催することを考え、久米と能楽とのかかわりを追究するのが最適であろうという判断を下した。展覧会開催の四年前に遡る〇八年七月に美術館は参事の高田誠二、学芸員の伊藤史湖・梶田里佳、研究員の福川知子・森田健太郎・高松和子の諸氏による準備を開始し、定期的に会議の場を持つなか、筆者は監修者として〇九年八月から月一回程度参加した。その成果は、一二年六月二日から七月二二日まで久米美術館開館三〇周年記念「久米邦武と

能楽―岩倉具視の能楽再興を支えた人物展^{フット}」（以下、「久米邦武展」とする）に結実したが、美術館蔵の貴重な資料を数多く展示したことなど、能楽研究に資する内容になったと思われる。

また「久米邦武展」開催に当たり、能楽資料センターは特別協力の立場で関与し、久米美術館は二〇一二年度のセンター公開講座に協力するという連携を結ぶことにした。そのため、講座初回となる今回はとくに展覧会に沿うようなテーマを選んだというわけである。

ちなみに久米美術館はJ・R山手線の目黒駅から徒歩一分という立地条件に恵まれた久米ビル八階にある（住所は東京都品川区上大崎）。このビルは久米邦武が『実記』の印税で購入したという広大な地所の一部に建てられたものだが、久米がここを買い求めた目的は居住用というより農作業などの実験用だったと聞いている。

I 現在の能楽界における久米邦武の評価

本稿の冒頭で久米邦武のことを「今日の能楽界においてはほとんど忘れ去られてしまった存在」と述べたが、

じつは最近になって、注目されるようになった。一九八八年から九一年にかけて吉川弘文館より『久米邦武歴史著作集』全六巻が刊行されたが、第五巻『日本文化史の研究』（一九九一年刊）に能楽関係の論考一七編がまわって掲載されたのである。天野文雄氏は「この著作集の刊行によって、久米が能についてこれだけ多くの論文を執筆していたことに驚いた能楽研究者は少なくないであろう。かく言う筆者もその一人である」と率直に述べている¹。また氏は、能楽研究者としての久米の存在が忘れられた理由を、大隅一雄氏著「久米邦武と能楽研究」²に言及しつつ「明治四十一年から四十二年にかけての吉田東伍による世阿弥伝書の発見・紹介が近代能楽研究の元年と位置づけられている結果」としている。

天野氏の記述は久米に対する現在の評価を的確に表すものと思われるが、「久米邦武展」の準備を進めるうち、筆者は久米が能楽研究者という枠を超えて明治時代の能楽界に多大な貢献をしたことを知った。すなわち、久米の業績には以下の三点があげられよう。

① 明治初年、ヨーロッパでオペラを見て能楽の価値

を認識したこと。

② 能楽史および作品論・演劇論など、多岐にわたる能楽の研究を行ったこと。

③ 明治・大正期の能楽に関する記録を書き残したこと。

②に関しては前述のとおり、「近代能楽研究の元年」以前から久米が意欲的に能楽を研究していたことが周知されつつある現状にあるが、①に関してはあまり顧みられていないと言っても過言ではないだろう。そして、①②が忘れられてしまった事実に対応するように、久米の残した③の貴重な記録が現在の能楽研究に十分に活用されているとは言い難い状況にある。

本稿では、③を視野に入れつつ、①の経緯を詳しく見ていきたいと思っているが、あわせて、なぜ久米が能楽界から忘れ去られた存在になったのか、その原因についても改めて追究したいと思っている。また②に関しては、その論考を概観し、久米の能楽理解がどのようなものだったかを紹介したいと思う。

なお本稿の最後に付録として必要と思われる人物のプロフィールを付した。また久米美術館のご厚意により美

術館作成の「久米邦武展」チラシ、「久米邦武と能楽
関連年表」、「久米邦武 主な能楽関連論文」も付した。
適宜、参照されたい。

Ⅱ オペラとの共通性から能楽の価値を認識し た初期の人物

七〇〇年近い歴史を有する能楽には三度の危機があつたと
言われている。³ 第一が応仁文明の乱によって京都が灰燼に
帰した時、第二が明治維新時、第三が太平洋戦争の敗戦時
である。そのうち第二の危機が最大のものであつたと言わ
れている。江戸幕府および諸藩の式楽（式典用の演劇）であ
つた能楽は、明治維新において幕藩体制が瓦解したこと
により雇用主を喪失し、極端に衰微してしまつたのである。

このような危機に瀕した能楽が再興するきっかけとなつた
のは、従来の定説では、岩倉具視がヨーロッパで鑑賞した
オペラを通じて能楽の価値を発見したことと言われてきた。
しかし、明治時代にオペラとの共通性を見出したと伝わる
人物には岩倉のほか、たとえば成島柳北、土方久元、久米邦武
らがいる。また拙稿「岩倉具視

の能楽政策と坊城俊政―明治一〇年代を中心に―では、
岩倉がヨーロッパで能楽とオペラの共通性に気付いてい
なかつた可能性を指摘した。⁴

そこで本章では、それぞれの人物が何を契機にオペラ
と能楽の共通性を認識したのかななどを詳らかにしてい
きたい。

(1) 成島柳北の場合

幕末・明治初期の文人かつジャーナリストであつた成
島柳北は、一八七二年に東本願寺法主の大谷光瑩の欧州
視察に随行し、翌年三月一二日にパリでオペラを鑑賞し
た。その時の様子を『航西日乗』に記しているのので、以
下に引用する（傍線と番号は筆者が私に付した）。

此夜ブーセイ同行諸子ヲ招キ「オペラ」ノ演劇ヲ観
セシム 此国第一ノ劇場ナリ（一席ノ価八十フラン
ク） 場内広サ二千五百人ヲ容ル可シ 正面ニ帝后
ノ観棚有リ 看客皆礼服ヲ着クルヲ例トス① 其演
劇皆古言ヲ用フ 殆ド我邦ノ散楽ト趣キヲ同ジクス

②) 而シテ女伎ノ舞踏ニ至テハ他ノ劇場ニ異ナル所
無シ 唯ダ美麗ヲ極ムルノミ 戯中水底ノ景色ヲ示
ス 密ニ銀線ヲ張り中ニ緑藻青萍ヲ点シタル如キハ
実ニ人目ヲ眩セリ 歎ヲ尽クシテ帰ル 夜雨

①) によれば成島はブーセイという人物に招かれてル・
ペルティエ街のオペラ座でオペラを鑑賞し、②)にあるよ
うに能楽とオペラの共通性を認識したのである。「(4)
久米邦武の場合」に後述するが、じつは久米邦武がベル
リンでオペラを鑑賞し能楽との類似性に気付くのが成島
のオペラ鑑賞日の一日前の三月一日のことであった。
この偶然には驚くばかりだが、成島は能楽とオペラ
の共通性に気付いたごく初期の人物なのである。しか
し、能楽がオペラに匹敵する高い芸術性を持つ演劇で
あることを認識したとまでは言えないのではないだろう
か。その理由には二点あげられよう。第一点は、②)に見
られるごとく、成島はオペラと能楽の共通点を「古語ヲ
用フ」としているだけで能楽の価値を積極的に評価して
いるわけではないこと、第二点は、芝能楽堂が開場した

一八八一年以前には一般的に能楽を猿楽と称しており、
「散楽」と記す柳北の知識には限界があったと思われる
点である。なお①)を見ると、成島はオペラ劇場の壮麗な
様子に注目し、観客が礼服を着用することを記してい
る。この点も久米の記述と類似するところであり、やは
り(4)で述べる。

(2) 土方久元の場合

土方久元は農商務大臣や宮内大臣を歴任した土佐藩出
身の政治家であり、能楽会の初代会頭をつとめるなど能
楽界に寄与した人物として知られている。しかし、彼が
オペラとの比較を通じて能楽の価値に気付いたことは今
まで話題に上らなかつたと思われる。

そのような土方がオペラと能楽との共通性を説いたと
する資料に、飯田巽編纂『能楽会史』(早稲田大学演劇
博物館蔵)があり、当該の部分を以下に引用する(傍線
と番号は筆者が私に付した)。

歐洲ノオペラナルモノハ蓋我國ノ歌舞伎演劇トハ其

脚色異ナル所アリテ実ハ能楽ニ類スルモノナルコトヲ知了シオペラニ倣フテ我帝室ノ交際会廷ニ利用ヘキモノハ能楽ヲ措テ他ニアラサルヘキヲ認ムルニ至リ①爾來其時機ノ来ルヲ俟テリ 然ルニ今有志諸君カ能楽会ヲ興シテ斯樂維持發達ヲ謀ラントスルハ恰モ久元カ思慮ニ投シタルノ拳ナレハ深ク之ヲ贊成スル②

①では、オペラと類似する能楽をもつて皇室の交際などに用いるのが最適であると述べ、②はそれが土方の考えと合致することを言っているが、オペラと歌舞伎と能楽を比較した結果、歌舞伎より能楽のほうがオペラに似ていることを導き出している論法が非常に興味深い。と、いうのも、演劇改良運動を推進する演劇改良会が結成された一八八六年以降、能楽界でも歌舞伎を意識せざるを得なくなつた状況になつたと思われ、この記述は演劇改良運動以降に記されたことが言えるのである。

能楽会は能楽社を改組する形で一八九六年に発足した組織だが、会頭の土方が早くに能楽の芸術性を認識して

いたのであれば、それは能楽会の權威を高めるのに有用であつただろう。管見ながら土方がオペラと能楽の共通性を説いたことを記している資料は『能楽会史』以外に発見できていないので、この状況を考えると『能楽会史』の記述については慎重に検討する必要があると思われる。

しかし、『能楽会史』に土方が能楽とオペラに共通性があるという所見を持つていたとする文章が掲載されていることには、もうひとつの意味を見出すことができるように思われる。この点については「Ⅲ 池内信嘉が岩倉具視説を提唱した理由」で考察したい。

(3) 岩倉具視の場合

前述したように、現在の定説では岩倉具視が特命全權大使として米欧を回覧した際、オペラを鑑賞して能楽の価値を発見したということになっている。この説を提唱した最初の人物は能楽研究家の池内信嘉であろう。『能楽盛衰記』下巻「東京の部」(以下、『盛衰記』とする)に記された池内の見解を以下に引用する。(傍線と番号は

筆者が私に付した)。

この時に方り、能楽再興の機運を醸成するに至らしためたのは、実に明治四年岩倉具視卿が大使となって欧米視察に赴き、能楽の捨つべからざる事に心づかれたのに起るのである。①(略)其の当時王宮の饗宴に招かれ、屢彼の国の楽劇を観られるに及んで、其の国々に固有の舞楽の必要である事を深く感ぜられ、当時随行の久米・西岡氏等とも種々談された結果、能楽保存の必要を認められ、帰朝後着々其の實現を計られたのである。②

①に岩倉具視がヨーロッパで能楽の価値にいち早く気づき、②に「随行の久米・西岡氏等」と相談したことが記されているが、拙稿「岩倉具視の能楽政策と坊城俊政」では、その可能性が低いことを述べた。その理由の第一は、この記述には不自然な点が認められるのである。というのも、岩倉が相談した「久米・西岡」は久米邦武と西岡遼明のことであるが、西岡は岩倉率いる使節

団ではなく、左院視察団の一員として渡欧したのである。岩倉が右大臣という高官の立場であったとしても、左院視察団に属する西岡を自身の随行員とするには無理がある。しかも、西岡は岩倉使節団の訪問日程の途中で参加し途中で帰国しているのに対して、岩倉の随行員であった久米は岩倉と一緒に時間を過ごすことが多く「岩倉具視の腰巾着」とまで呼ばれていた。そのような久米と西岡を抱き合わせたような形で、岩倉が能楽について相談する状況が現実的であったとは思われない。

第二の理由は、『実記』によれば岩倉使節団がヨーロッパでオペラを鑑賞したのは一八七三年三月二一日、ベルリンの帝室オペラ劇場においてである。「(4)久米邦武の場合」で改めて述べるが、久米はここでのオペラ鑑賞を通じて能楽との共通性を『実記』に書くのだが、一方の岩倉は『岩倉公実記』同日の記述に「此夜具視等皇室ノ「オペラ」ニ陪従ス」とあるだけで、オペラそのものに対する所感を述べてはいない¹¹。また、岩倉が能楽とオペラの共通性に言及した記述を筆者は探して得ていない。それでは何を根拠に池内はこのような説を記したのであ

ろうか。それについては「Ⅲ 池内信嘉が岩倉具視説を提唱した理由」で考えてみたい。

(4) 久米邦武の場合

久米邦武は一八七八年一〇月に『実記』を太政官から刊行する。この膨大な記録は岩倉使節団の公式報告書と言えるものだが、近年、『実記』は「久米が個人的に執筆を開始し、編纂が進んだ段階で太政官の公式記録として刊行されることが決まった¹²⁾と指摘されるようになった。つまり、当初から政府の公式記録を残す意識をもって欧米で見聞したことを書き留めていたのであれば、そこに個人的な感想を記す余地はなかったと思われるが、『実記』の場合は久米が自発的に書き始めたものであったため、彼個人の所感が随所に書き込まれているのである。

ここにベルリンでオペラを鑑賞した一八七三年三月一日の『実記』を引用する。¹³⁾

夜 皇帝ノ劇場ニ赴ク（是ヲ「オヘラ」ト云、諸種

ノ芝居中ニテ最上等ナルモノ猶我猿楽ノ如シ）

『実記』に個人的な所感が書かれていることを考慮すると、さまざまな演劇のジャンルのなかで、最上等である点が「オヘラ」と「猿楽」（当時は能楽を猿楽と言うのが一般的であった）に共通するという指摘は、あくまでも久米の感想と言えるもので、岩倉も同様に感じたのかどうかは不明である。なお前述したように成島柳北がパリでオペラを鑑賞し能楽との共通性を説いたのが三月一二日である。この偶然をどう考えるべきかについて検討する必要のあるところであるが、『航西日乗』が『花月新誌』一一八号から一五三号（一八八一年一月から八四年八月）にかけて発表されたことを思うと、久米が成島から何らかの影響を受けた可能性は低いであろう。¹⁴⁾

久米は一八七三年に帰国すると『実記』草稿を書き始めるが、その決定稿を作成するまでに一〇回以上の推敲を重ねたと思われる。帰国直後の草稿には「夜オペラの享あり 王の観場なり 但 王は来らず」と書かれているだけで、「猿楽」との類似性に触れる内容にはなっ

いない。それが七六年頃になると「夜 帝ノ観劇場ニ赴ク 是ヲ「オペラ」ト云 芝居ノ内ニテ最モ上品ナルモノ猶我猿楽ニ似タリ」と、最も上品な演劇である点が能楽と共通すると記すようになる。¹⁵これが久米自身の所感であったため、推敲を重ねた結果、最終的に「猶我猿楽ノ如シ」と切れ味のよい表現に落ち着いたと思われる。しかし、当初は「オペラ」と書いていたのに、残念ながら完成稿では「オヘラ」に変えてしまった。

繰り返しになるが、久米が『実記』を出版したのは一八七八年であり、これは成島柳北が『航西日乗』を『花月新誌』に掲載し始めた八一年より三年も前のことであり、土方久元が能楽会会頭に就任した九六年より一八年も前のことである。そして、岩倉具視がオペラにかかわる感想を残していないことを考えると、ヨーロッパでオペラを鑑賞して、その比較から能楽の価値に気付いた最初の人間は久米であると断言できよう。

Ⅲ 池内信嘉が岩倉具視説を提唱した理由

(1) 岩倉具視説が虚構である根拠

前述したように、岩倉具視が能楽とオペラの共通性に言及した資料はない。それどころか、一九〇四年一〇月に開催された第一回能楽文学研究会で久米邦武が能楽再興の経緯を講演した際、自分こそ岩倉に能楽の価値を言及したことを発言しているのである。少々長くなるが次にその講演記録（以下、「能楽文学講演」とする）を紹介する（傍線と番号は筆者が私に付した）。

私は能は元と至つて不案内で小謡の一つも知らぬものでしたが、不図した事から、岩倉贈相国が能楽社を創められ、芝山内へ能楽堂を建設せらる頃の参謀となり、引続いて能楽社の幹事となり、十余年間能楽の世話を余儀なくせねばならぬこととなり、色々の出来事に遭遇したことでありますから、本日は其経歴の御話を致さうと思ひます①（略）

諸君も御承知の通りベルサイムに荘大な王宮が有

つて、其中にオペラ堂といふものは実に莊麗を極めたもので、一日友人西岡遼明と共に之を順覽して、是れだから礼服が入るのである、元来訛語が悪いのだ、芝居見物に礼服といふから怪んだので、御能拜見といへば能く判つたのだと話しました（笑声起る）②、其時段々話が進んで、一体日本人は歌舞音楽の事に迂濶であつて、優美な娯樂を得る道に乏しい、芝居が一般の風俗舞歌となつて居るが、是はセートルと比すべきもので大分品位が落ち、日本では礼服を着て見るものといへば能であるが、今の有様では能は帰国までには潰れるかもしれぬ、一体日本は自国に成立つたものを捨ててしまふ弊があるが、後來歌舞音楽が発達して来る場合に、西洋の真似計りするでもあるまい、音楽歌舞は其国民の性情に適するものでなくてはならぬが、日本に行れて居るものでは能より外には取るものがない、どうかして能を保存する道を立てたいのだがといふことを話合つたのですが、是れが私が芝へ能楽堂を建て、能楽保存の世話をせねばならぬ運命の誘引になつたのであ

ります。③

明治一一年の暮と記憶しますが、岩倉公から召れたから往て見ますと、能は保存すべきか、自然に放任して置くべきかといふ問題が出ました、そこで予て心にあつたことですから直に保存の道が付くならば無論保存すべきものであります、日本は自分の國に成立つたものを抛棄して仕舞ますが、能は少なくとも五六百年の間に進歩した大仕掛けのものであります、決して捨てるものではありません、自國に成立つた歌舞音楽の進歩せぬのは文明の世の中に於て恥づべき事であり申すに申す、又能は如何なるものかとの御尋がありましたから、是れは日本の風俗歌舞で、人の精神を慰める為に用るもので、四角張つたものでないと思ひます、其由来に就ては色々調べたこともあり、又私の説もあります、兎も角國に無くてはならぬものであるとキツパリ言切りました④、それならば保存法を考へて見よとの事で其日は別れ其後一ヶ月程経つて保存方法を立られ、其方法書を送つて来られて私にも意見を言へとのことであ

りました、其大略を申せば、其頃流行の予算といふ筆法で、大華族に醜金させ、十五ヶ年の積利法であつたのです、そこで私は之を持って岩倉公の所へ行き、是計りの金を集めて能を保存するとは望みが無い、給禄全廃の世の中で、僅か給料代りの救恤する位の事で維持の道が立つもので無いと、実は悪口を言つたのです、そんならどうするかと詰問されましたから、能師自身には芸道研磨の競争心を起させ、一方に向ひては一般を勧誘して其流行を促すこととなさなければなりません、今梅若実が自宅に舞台を立てて芸道を維持して居るが、見物人が少なくて誠に哀れなものである、是れも僅かに観世流の一部丈けであつて、其他各流の芸人は、舞台も持たねば、芸道を研磨く事も出来ぬ、依つて先づ舞台を建て、各芸人に芸道を研磨する道を開いてやり、公衆を誘導して観能を促し、自然の競争場裡に、芸も進めば人氣も集るといふ風に補助誘導するのでなく、是れも保存の道は立ちませぬと申た⑤、岩倉公といふ方は始めは烈しく叩付て中々やかましいが、

自分が一度悟らるる時は、頓着なく人の説を容れらるる方であつたから、暫く私の顔を見詰て居られたが、成程貴様の言ふのが良い、其れでは其方針でやらう、じつは今四人程頻りに能の保存を主張して居るものがある、近日其連中を呼ぶから貴様も来いと言れましたが、其四人といふは九条公、加賀の御隠居、坊城式部頭、藤堂侯であつて、外に丸岡式部助も加り、論議の引かかりから自分も加らなければならぬこととなり、猶加へる人は無いかとの事で、その頃同勤であつた重野安禪は、小鼓を打つ関係もあるから、是れを加へるが良からうといふことになり、程なく会合も催され、いよいよ能舞台も建て、能楽保存をやらうといふことになり、岩倉公の御説で、能役者といふと猿の様な奴計りだが、宝生九郎は猿でない、随分話せるからあれに相談をせい、其れでは是れ迄に芸道を維持して居たことであるから梅若にも仰付られたといふので、兩人を相談役とし、一方はお大名、一方は猿楽師、其の中に立つて太郎冠者のアド役を勤める様な訳で、丸で靱猿の狂

言をやつて居る様な関係であつたのです（大笑）

④を見ると、一八七八年暮頃に岩倉に呼び出された久米は能楽がどのようなものであるか、またその保存の可否を尋ねられ、日本にとって必要不可欠なものであると即答したとある。同年七月、青山大宮御所の能舞台開設に岩倉が尽力したことを考えると、やや不審を感じるが、ヨーロッパで岩倉が能楽の価値にいち早く気が付いたという定説を覆す内容になつていよう。

また、②の記述には、久米がヨーロッパを訪問した際、友人の西岡遼明とともにヴェルサイユ宮殿にある荘厳なオペラ劇場を見て、オペラは正装して鑑賞する演劇であることを知り、当時は庶民が楽しむ演劇であつた歌舞伎の意味で使われていた「芝居」に対応する外国語に「セートル」が用いられていたため、オペラもセートルの一種と考えていたが、これは大きな間違いであり、オペラは品格のある演劇であり、その鑑賞は「お能拝見」と同様であることを認識するに至つたことが書かれている。つまり、久米と西岡はオペラ劇場という建築物を見る

て、オペラと能楽の共通性を話し合つたのである。ちなみに久米がドーバー海峡経由でフランスに渡つたのが一八七二年一月二六日であり、七三年一月一日にヴェルサイユを訪れ、同月一日に再びヴェルサイユに赴き陸軍士官学校を見学したあと宮殿を一覧している。¹⁷しかし『実記』には、②のように西岡と壮麗なオペラ劇場のんびりと順覧しながら「お能拝見」に思いを馳せ、③のごとく能楽保存の必要性を連想した様子はうかがえない。ヴェルサイユ宮殿内のオペラ劇場については『実記』一月一日に「ヴェルサイユ」宮ニ政府ヲ設ケ、其「オペラ」堂ヲ以テ議院トナシタリ」とあるだけで、竹内裕一氏の「壮麗なるオペラ堂を見るに至つて、痛切に国民娯楽の必要を感じ」た人の文章とはとうてい思えないほど、簡潔にその時の現状を表現したにすぎないものである。¹⁸という指摘は正鵠を得たものである。成島と同様、建築物としてのオペラ劇場から能楽を連想したことや、『実記』の伝える雰囲気とあまりにかけ離れている点など、『航西日乗』を意識したようにも思われる。「能楽文学講演」の内容には検討を要する部分がある。

それを差し引いても、久米の発言は示唆に富んでいる。というのは『盛衰記』には「当時随行の久米・西岡氏等とも種々談された結果、能楽保存の必要を認められ、帰朝後着々其の実現を計られたのである」と「久米・西岡」という名前が揃っているが、前述のごとく岩倉具視がこの二人と相談する不自然さを考えると、池内は「自分と西岡が話し合った」という久米の発言を「岩倉が二人に相談した」と改変した可能性が考えられるからである。この推測があながち的外れでないと思われるのは、池内は能楽文学研究会の発起人の一人であり、もちろん当日も参加して久米の講演を聞いている。さらに『能楽』は池内が発行していた雑誌であり、当然「能楽文学講演」を読んでいるはずである。したがってオペラ同様の価値を見出したのは岩倉より久米のほうが早いことも知っていたと思われるので、池内は意識的に前述のような「岩倉・久米・西岡の三人で相談した」という虚構を作り上げたという結論を導いても間違いではないだろう。

(2) 池内信嘉が虚構を作り上げた理由と時代背景
 それではなぜ池内信嘉がこのような虚構を作り上げたのであろうか。

「能楽文学講演」⑤で久米邦武は岩倉具視に能舞台を建設することを進言する。能役者が切磋琢磨する場である能舞台を用意することで芸位が上がり、それが観客動員に繋がり、能楽の再興の道も開かれると計算したのである。競争原理を導入しようとした久米の思考には近代的合理性が看取できるが、「能楽文学講演」①によれば、久米は芝能楽堂の運営母体である能楽社の「参謀」として一〇年間ほど芝能楽堂で催される公演の制作にかかわったのである。しかし、不幸なことに能楽会設立に当たって排斥されてしまう。その当時のことを久米は以下のように回想している。

久米如き迂濶な男に任せるから此様な事になるのだと、終に不服な人々が現在の能楽会を組織し、私はこの団体から放逐され、十年の職務は至つて不首尾に終つたが、私としては肩の荷が下りた様なもので

あつた。

これによると、久米を「放逐」するために能楽会を設立したごとくに読み取ることができる。あまり根柢のない推論であるが、飯田巽が久米を追い出したのではないだろうか。そうだとすれば、池内にとつて当時の能楽界で活動するには飯田と協調する必要があつたと思われ、飯田と何らかの確執があつた久米が能楽社に貢献した事実を無視せざるを得なかつたのではないだろうか。たとえば『盛衰記』「第四 能楽社の設立」で、久米に関しては能楽社の「参謀」であつたことには一切触れずに「重野・久米両博士の手に成つた日本歌舞源流考の著もこの時であつた²¹」と歴史学者としての側面を記すだけである。一方の飯田に対しては「飯田巽氏の出馬」という項目を設け、林直庸の死去に伴い「取締の一員に列して居られた当時の内蔵助飯田巽氏が出て林氏に代らるることとなつた」とある。「第六 能楽会の設立」でも会頭の土方久元が宮内大臣であつたため「常務会幹飯田巽氏は内蔵助であつたから、下意上達の上に最も都合がよ

く」と、飯田のことを讃えている。

能楽会の権威付けに土方が能楽の価値を発見したという説が流布していたとすれば、池内は『盛衰記』を出版する際、「土方より久米のほうが早くにヨーロッパでオペラを見て能楽の価値に気付いた」と書くのに躊躇したのではないだろうか。そこで、土方より身分も立場も上位の岩倉具視が早くに能楽の価値に気付き、久米と西岡に命じて再興の可能性を探らせた、という虚構を作り上げるという苦肉の策を講じたのではないだろうか。

池内が虚構を記したのは彼の個人的な事情によるところが大きかつたが、そこに歴史的背景を見ることもできよう。たとえば「久米邦武展」のチラシに掲載された錦絵「紅葉館舞台開図」は一八八一年四月の芝能楽堂舞台開きにおいて宝生九郎知栄が〈高砂〉の前シテを演じている場面を描いたものである。錦絵は正確さよりも華やかな雰囲気を描くことを優先することが多く、そのような錦絵の特質を考慮しても「紅葉館舞台開図」には驚くようなことが描かれている。その一例に場面が〈高砂〉前場であるにもかかわらず太鼓方が演奏している点が指

描できるが、これは絵師の無知から生じた間違いであろう。もう一点、絵師がわざと事実とは異なる描写をしていると思われる部分がある。

舞台開き初日は英照皇太後の行啓があった。しかし錦絵には髯をたくわえた軍服姿の男性が見所の中心に座る構図になっており、この男性が誰かは記されていないが、明治天皇であることは明白である。つまり、実際の行幸がなかった天皇の姿を堂々と描いているのである。錦絵の大らかな感性を確認するようだが、このようなことが通用した時代背景があったのであろう。池内が『盛衰記』を著したのは一九二六年であるが、土方より高貴な身分の人物が能楽の価値を認識したという説を立てることに抵抗がない時代だったのではないだろうか。

ちなみに明治天皇が錦絵に姿を現すようになるのが一八七六年の東北巡幸の前後からで、錦絵に天皇の姿を描く場合、キャプションにそれを書くことはなかったが、一目見れば天皇とわかるような描き方がされたという。

西欧において絶対的権力者は視覚化されることで、さ

らにその権力を高める効果があったのであるが、錦絵「紅葉館舞台開図」の発想には、能楽という芸術を見る明治天皇を視覚化することによって天皇は見られる存在になり、天皇が見た能楽という芸術もその権威を高めることに繋がったと思われる。絵師にそこまでの意図があったかどうかは不明だが、行幸のなかった天皇が能楽を鑑賞する構図を持つ錦絵は示唆に富むものである。なお「紅葉館舞台開図」に関しては伊藤史湖氏のご指摘を受けて、はじめて気付いた次第である。

(3) 岩倉具視を支える人物に徹した久米邦武

『盛衰記』の記述に虚構があるとすれば、久米邦武の業績を再評価すべき時期が来たのではないかと思われる。しかし、久米が忘れられたのは『盛衰記』だけが原因ではないと思われる。

「能楽文学講演」①の冒頭で久米は自身のことを、小謡を全然知らず能楽に関する知識など持ち合わせていない人間であると言っているが、謙遜に満ちたこのような言い回しは久米一流のもので、佐賀藩士であった彼は武

士のたしなみとして幼い頃から能・狂言に親しんでおり、大変に記憶力のよい人間だっただけに小謡のこともよく知っていた。しかしこのような姿勢が後に、池内による虚構が浸透する土壌を形成してしまっただけではないだろうか。

久米は歴史学に留まらない広範な研究を繰り広げた学者であるが、一八九一年に発表した論文「神道は祭典の古俗」が神道家の攻撃に遭い、東京帝国大学を辞して大隈重信が創設した東京専門学校（のちの早稲田大学）に移ることになるが、このような筆禍事件を起こした人物であるため、能楽界からも「久米如き迂濶な男」と非難される事態に陥ったと思われる。

しかし久米は能楽界に固執することなく、「十年の職務は至つて不首尾に終つたが、私としては肩の荷が下りた様なものであつた」と回想する久米の発言は決して負け惜しみではなく本音であつたと思われる。このような潔さも久米が能楽界から忘れ去られてしまふ原因のひとつであると思う。

さらに、拙稿「岩倉具視の能楽政策と坊城俊政」に書

いたが²²、久米は晩年になって、ヨーロッパで能楽の価値に気付いた人物に岩倉具視をあげていることも見逃せない。以下にその部分を引用する。²³

岩倉右府は歐洲諸国に於て、最高の演劇は帝室又は國家の補助を受けて存在し、國賓を迎へては、之を接待の用に供するを實見し、能樂は日本で最も高尚な演芸なれば、其衰滅を閑却すべからずを痛感して居られたが、國事多難の間、遂に演能の再興を囑る機会なかつた。(略)

相当堪能な樂師を集めるのが困難である為、聖意に添ふ事が出来ぬ事情があるを聞き、岩倉公は最早一日も猶予されぬと奮つて能樂會の設立を發企され、聖上の御孝養の一助とする目的を以て、広く華族有志の醸出を勧誘し、能舞台建設の計画が熟してきた。

これによると、ヨーロッパにおける最高の演劇（つまりオペラ）と同様、國賓接待のため能樂を活用すること

を思い立った岩倉が、その再興を意図し、その結果、芝能楽堂が創建されたことが語られているのである。さすがに久米も、岩倉がオペラ鑑賞を通じて能楽の価値に気付いたとまでは言っていないが、岩倉がヨーロッパで能楽再興を意図したとする記述は、「能楽文学講演」と矛盾するところである。晩年の発言だけに記憶に混乱が見られる部分もあるが、能楽復興を岩倉の業績と位置付けようとする久米の意思が表れたものとも考えられよう。「岩倉の腰巾着」と言われた久米の、岩倉を陰ながら支える人物に徹する姿勢をここに見ることができると思われる。

以上のような要因もあって、久米は能楽界から忘れ去られた存在になってしまったのであろう。ちなみに『盛衰記』はこの久米の発言も参照して書かれたように思われる。

IV 久米邦武の能楽研究

久米美術館の調査によれば、能楽・芸能にかかわる久米邦武の主要な論考・随想は「侏儒俳優」（『史海』一八九四年三月号）から「中将姫と当麻寺の疑問」（『能楽』一九一七年一月号）まで、約三〇年間にわたり六九点が執筆された。そのうち『能楽』に発表されたものが四〇点と大多数を占めているが、『早稲田文学』に掲載されたものも二〇点ある。

これらの論考・随想を概観し、久米邦武の能楽研究の特徴について以下に簡単に紹介したい。なお久米の能楽研究を論じた近年の論考に大隅和雄氏「久米邦武と能楽研究」や天野文雄氏「久米邦武の能楽研究」があげられる。²⁴

A 能楽史研究

久米が『能楽』一九〇五年一月号に発表した「能楽の起源及変遷」は能楽の源流を薩摩隼人の舞に求めた「隼人起源説」を提唱した論文であるが、吉田東伍が一九〇五年一月に催された第四回文学研究会でこの学説

を否定する。²⁵この事実があまりにも有名なため久米の能楽研究には古色蒼然としたイメージが付きまといっているように思われる。

「能楽の起源及変遷」は不思議な論考である。というのも、一八八一年五月に重野安禪が能楽史に関する講演を学士院会館で行い、その記録「猿楽田楽ノ源流」を『風俗歌舞源流考 上』として重野の名前で『東京学士院雑誌』（同年一二月号）に掲載するものの、久米がその約二五年後に発表した「能楽の起源及変遷」は重野の講演記録とほぼ同じ内容であり、二人の論考にはともに「単人起源説」が記されている。池内信嘉が『盛衰記』に言う「重野・久米両博士の手に成つた日本歌舞源流考の著もこの時であつた」の「この時」が一八八一年の芝能楽堂創設時であることを考えると、「日本歌舞源流考」とは「猿楽田楽ノ源流」を意味することと思われる。重野の名前で発表した研究に久米がかかわっていたとすれば、どのように関係したのか。なぜ「能楽の起源及変遷」を久米は自身の論文として発表することになったのか。久米の能楽研究は歴史から始めたと思われるが、そ

こには今後には解明されるべき課題が多く含まれていると思われる。

B 多角的に能楽を考察する視点

歴史的視点で能楽を考察するのみならず、作品論・演劇論を述べるものも多く、久米は多角的に能楽を考察する視点を持っていた。結果、論考に扱う内容は非常に幅広いものになっている。

C 難解な内容

久米独特の術語を用いている記述や論旨の飛躍がままた見られ、理解するにはなかなか難しいものが多い。たとえば現在、能の構成区分に「段」という語を用いているが、久米はこれに相当するものとして「関」という語を用いて「体例」を考察している。

D 科学者の視点

久米は能楽を非常に愛好していたが、対象にのめり込むことなく、科学者の視点から客観的に能楽を論じていた。

E 該博な知識の裏付け

久米には幼少期から学んだ漢文の豊富な知識があり、さらに使節団としてアメリカとヨーロッパに二年近く滞

在した点、まさに博覧強記の人であった。

漢文の教養を示す例に〈海人〉の三つの宝物を扱った以下を挙げたいと思う。

次に「興福寺へ三つの宝を渡さるる、²⁷」といふのも、昔しは四書五経を幼時に素読させられて書経の寓意に四浜浮磬准夷浜珠と、記憶に存じて居る耳には、恰も芦刈に狂言が難波のあしは伊勢の蛤と語るを聞てフツと笑ふと似てゐる。このフツと笑ふ所を興味としたのであらう。²⁷

漢文の典籍にある「四浜浮磬准夷浜珠」を〈海人〉で「花原磬、四浜石、面向不背の玉」と言い換えているのは、能〈芦刈〉で「伊勢の浜荻」を「伊勢の蛤」と狂言方が言い換えて言う駄洒落に似ている点が面白いというのである。現在、〈海人〉を見て、この部分を面白く思う観客がいるであらうか。

F ユーモアの精神

「能楽文学講演」には受講者がよく笑う様子も記され

ており、次項目に引用する記述などからも久米のユーモアに溢れた精神が伝わってくる。

G 歌舞の要素の強い能への関心

当時の能楽界は〈安宅〉など劇的な能を好む雰囲気にあつたが、久米は劇的なものよりも歌舞の要素が濃いものが好みであつた。だからこそヨーロッパでオペラを見て能楽を想起したのであらう。「能楽は劇歟」²⁸は久米の能楽関係の代表的な論考と言えるもので、能楽が歌舞伎のような劇的な表現を志向する演劇かどうかを論じている部分がある。以下にその一部を引用する。

謡曲は詞と歌とにて成立ち、物語と歌舞の混合のものたるに因て、分析論をすれば諸預が鰻に成かつた様なものである上に、其筋は夢幻になりて、ひたすら舞振の美態を撫で出すに都合よく、謂ゆる只人ならぬ装ひを主としたるものなる故に劇の常理を以ては摸捉されぬ、歌舞に偏よつたものと言わねばならぬ。²⁹

「物語と歌舞」が融合した能は、「藪積が鰻に成かかった様な」いわば不思議な化学反応を起こして、「其筋は夢幻になりて、ひたすら舞振の美態」を表出するものである。また「藪積が鰻に成かかった様な」という言い回しは能（山姥）のアイや狂言（成上り）の太郎冠者が語る内容であり、能楽に関する久米の知識が知られるところである。能楽の本質を語る際にこのような表現を用いる点に、久米のユーモアに溢れたセンスを見ることができよう。

まとめ——久米邦武が能楽再興に果たした役割

いささか楽屋落ちの話題であるが、「久米邦武展」の準備が大詰めになった二〇一二年早々、展覧会のタイトルを決定することとなり、準備に携わった全員が頭を抱えた。久米の能楽関連の業績が制作と研究の両方にまたがり、制作に関しては岩倉具視を陰で支えていた側面が強く、研究に関しては興味の対象が多岐にわたっていて全体像をつかみにくく、これらを的確に示すタイトルを考案するのが困難を極めたのである。そこで慎重に議論

を尽くし最終的に「久米邦武と能楽——岩倉具視の能楽再興を支えた人物展」に落ち着いたのである。

この展覧会では美術館の努力により、久米の能楽界における業績を紹介することに成功したと思われる。今日の能楽の隆盛を見ると、久米がいなければ別の形で存続していたことが想像されるほどに、久米が能楽界に果たした役割は大きかったのである。しかし、久米の能楽研究の対象は広く、本稿でも概要に触れる程度であったので、これに関しては今後の研究課題としたいと思う。

公開講座「久米邦武の能楽——岩倉具視を支えた博覧強記」および本稿作成に当たって久米美術館からは多数の貴重な資料の提示を受けるなど、多大なご協力を得た。竹本幹夫先生からは早稲田大学演劇博物館蔵『能楽会史』などに関する貴重なご教示を頂戴し、同館には資料閲覧のご許可をいただいた。また、小林貴先生および羽田昶先生から適切なご助言を頂戴した。別府真理子氏には編集・校正に関してお手数をおかけした。ここに改めて感謝を申し上げる次第である。

付録―主要人物のプロフィール

□池内信嘉（一八五八―一九三四）

能楽研究者。郷里の愛媛県で県会議員として活躍するが、一九〇二年四月に上京し、雑誌『能楽』発刊、能楽館の設立、能楽倶楽部における囃子方養成など、能楽界の発展に寄与した。主著に『能楽盛衰記』二卷（能楽会、一九二五―二六）。高浜虚子の実兄。

□岩倉具視（一八二五―八三）

幕末・明治前期の政治家。一八七一年に右大臣となり不平等条約改正準備のため特命全権大使として使節団を率い米欧を視察。七六年四月、自邸にて行幸能・行啓能・台覧能を、七九年七月に同じく自邸にてグラント將軍饗応能を催した。七八年七月、英照皇太后の居所・青山大宮御所の能舞台開設、八一年四月、芝能楽堂の創設に尽力するなど、明治維新で衰微した能楽を再興させた政治家として知られる。一六世宝生九郎知栄に謡を師事。

□久米邦武（一八三九―一九三一）

佐賀藩出身。歴史学者。一八七一年から七三年まで、

岩倉具視率いる使節団の一員となり岩倉に随行了した。帰

国後、七八年に太政官から『特命全権大使・米欧回覧実記』を発行。太政官編修官を経て東京帝国大学教授となり近代史学の創出につとめた。九一年「神道は祭天の古俗」を発表し筆禍を招いて大学を辞し、九九年、東京専門学校（現、早稲田大学）に移る。

□成島柳北（一八三七―八四）

幕末・明治初期の文人。朝野新聞主筆および社長をとめるなどジャーナリストとしても活躍した。東本願寺法主の大谷光瑩に随行して一八七二年五月から七三年七月まで欧米を視察し、のちに『航西日乗』を発表した。

□西岡逾明（一八三五―一九一二）

判事。宮城・長崎・函館控訴院長などを歴任。左院視察団として渡欧する。

□土方久元（一八三三―一九一八）

土佐藩出身。農商務大臣・宮内大臣などを歴任した政治家。晩年には国学院大学長・東京女学館長をつとめるなど、教育事業にも尽力する。一八九六年に発足した能楽会の初代会頭に就任。伯爵。

の
う

能

久米美術館
KUME
MUSEUM
OF ART

久米美術館 開館30周年記念



岩倉具視の能楽再興を支えた人物

久米邦武と能楽展



が
く

能

2012年 6月2日(土) — 7月22日(日)

休館日=毎週月曜日 (7月16日は開館、7月17日は振替休館)

主催=久米美術館

特別協力=武蔵野大学能楽資料センター

協力=早稲田大学坪内博士記念演劇博物館

後援=早稲田大学

入場料=一般700円/大高生500円/中小生400円(団体割引=20名以上各50円引き)

*資料リーフレット付き

久米邦武と能楽 関連年表 (久米美術館作成)

西暦	元号	能楽界の動き	久米邦武の生涯	(年齢)	世の中の動き
1839	天保 10		佐賀八幡小路に生まれる	(0)	1825 岩倉具視、京都に生まれる
1848	弘化 5	弘化勸進能が盛大に行われる		(9)	
1854	安政 元		佐賀弘道館にて学ぶ。1年上級の大隈重信らと共に勉学に励む	(15)	1853 ベリー提督、浦賀に上陸
1863	文久 3		江戸の昌平坂学問所(昌平黉)入学。翌年退学・帰藩し、鍋島直正の近習となる	(24)	
1866	慶応 2		長子として桂一郎生まれる	(27)	
1868	明治 元	江戸幕府が崩壊し、能役者が路頭に迷い始める	藩校弘道館の教諭となる。岩倉家の子弟の九州遊学に協力	(29)	1868 明治維新
1869	明治 2	観世清孝が徳川慶喜に随い静岡に移住。英国エジンバラ公来日	教諭を辞め、佐賀県権大属となる	(30)	
1871	明治 4		岩倉具視を特命全権大使とする岩倉使節団 横浜を出発。邦武は随行として参加		
1873	明治 6		3月、ベルリンにてオペラ観劇。9月、帰国	(34)	1872 新橋・横浜間に鉄道開通
1874	明治 7		西岡遼明らと観能。能楽師達との交流も始まる	(35)	
1876	明治 9	岩倉邸にて4月4～6日天覧能開催		(37)	1877 西南戦争終結
1878	明治 11	青山大宮御所に能舞台建設	『米欧回覧実記』刊行。オペラと能楽(猿楽)を対比した表現が見られる	(39)	
1879	明治 12	米国前大統領グラントが岩倉邸にて観能		(40)	
1880	明治 13	皆楽社(能楽社の前身)が、能楽保護団体として設立。皆楽社約の制定をはじめ、設立準備に邦武が関わったとみられる		(41)	
1881	明治 14	能楽社設立(久米邦武は世話人の一員となる)。芝能楽堂設立		(42)	
1883	明治 16	岩倉具視 没(59歳)。能楽再興運動は、大きな後盾を失う		(44)	
1886	明治 19		桂一郎、西洋画修業のため渡仏。明治26年帰国	(47)	1889 大日本帝国憲法発布
1890	明治 23	能楽社を改組し能楽堂と改称		(51)	
1892	明治 25		「神道は祭天の古俗」筆禍事件により帝国大学教授を辞す	(53)	1894 日清戦争
1899	明治 32		東京専門学校(現早稲田大学)文学科史学科の講師となる	(60)	
1902	明治 35	5月、池内信嘉 愛媛県松山より上京。7月、雑誌『能楽』創刊。邦武は、同雑誌に60点近い論文を発表し続ける(大正6年まで)		(63)	1904 日露戦争
1909	明治 42	吉田東伍校註『世阿弥十六部集』刊行		(70)	
1917	大正 7	吉田東伍 没(53歳)		(78)	
1922	大正 11		大隈重信の死去に伴い早稲田大学講師を辞任	(83)	1923 関東大震災
1925	大正 14		久米邸にて囃子会開催	(86)	
1931	昭和 6		久米邦武 没(91歳)		

久米邦武 主な能楽関連論文 (久米美術館作成)

題名	掲載誌	巻(号)	発行年月
侏儒俳優	『史海』	32	明治27年3月
文章の華実	『八紘』	9-13	明治29年1-5月
謡曲蟬丸に就て(久米邦武・西岡遼明両氏談)	『能楽』	1(14)	明治36年8月
熊野の曲を評解す	〃	2(4)	明治37年4月
能楽は容易に改む可きものならず談	〃	2(11)	11月
能楽文学研究会記事(久米博士演説要旨)	〃	2(12)	12月
能楽の起原及変遷	〃	3(1) 附録	明治38年1月
能楽文学研究会談話要領(久米邦武君演説)	〃	3(2)	2月
謡の拍子に就て談	〃	3(7)	7月
能楽の起源に就て談	〃	3(8)	8月
脇所作の能は古き作ならず談	〃	〃	〃
心の鬼	〃	3(12)	12月
謡の文章(能楽文学研究会演説筆記)	〃	4(2)	明治39年2月
日本は興り能楽は興らぬとは何ぞ	〃	〃	〃
謡曲の次第と昔の曲舞	〃	4(4)	明治39年4月
曲舞と白拍子舞	〃	4(5)	5月
歌舞奨励は戦後の急務	『早稲田文学』	2次(5)	〃
曲舞と居曲	〃	4(6)	6月
次第は序歌	〃	4(7)	7月
小歌と段物	〃	4(8-10)	8-10月
姿勢の美(能楽研究会席上口演)	〃	4(8)	8月
海土に就て(能楽研究会席上口演)	〃	〃	〃
鉄輪と絃上	〃	4(10)	10月
謡曲の詞と謡と歌	〃	4(11,12)	11,12月
謡曲の宗教趣味	〃	5(1-3)	明治40年1-3月
文学者諸君に望む(能楽研究会席上演説)	〃	5(4)	4月
能楽は劇敷	〃	5(6,8,910)	6-9月
杜若の唐衣と透額冠	〃	5(12)	11月
一声、サシ、クリ、論義ワカ原義	〃	5(13)	12月
謡曲を組織したる文段の標準	〃	6(1)	明治41年1月
邯鄲に付て謡曲の変格を論ず	〃	6(2)	2月
善知鳥は不可解の妙文	〃	6(6)	6月
翁の神秘は面にあり	〃	6(7)	7月
猿楽の起源	〃	6(8,9)	8,9月
物語の源流	〃	7(4)	明治42年4月
源氏物語の作者及び其節(物語の源流続稿)	〃	7(5)	5月

題 名	掲載誌	巻(号)	発行年月
狂言の新旧	『能楽』	7(5)	明治42年5月
源氏平家両物語と謡曲との関係	〃	7(6)	6月
物語の文学に於る効力及び口上演説	〃	7(7)	7月
風俗歌舞の変遷	〃	8(2)	明治43年2月
岩倉具視公(五)―紅葉館と能楽堂	『やまと新聞』		明治43年12月17日
花見風俗の今昔	『中央公論』	26(4)	明治44年4月
能楽の過去と将来	『能楽』	9(7)	7月
神歌は藤原氏後の作	『能楽画報』	4(1)	明治45年1月
新聞の能評	『能楽』	10(2)	2月
歴史を題材とせる謡曲の価値 ―放談会の所論を評して安宅の価値に及ぶ	〃	10(6)	6月
神能の意義	〃	10(9)	大正元年9月
	〃	10(12)	12月
見たき能と面白かりし能(三)(アンケート)	〃	11(5)	大正2年5月
目黒漫話(一)趣味	〃	〃	〃
能楽史	『能楽講義』	1(6)	6月
古代史と謡曲	『能楽画報』	6(8)	7月
朝廷の乱舞武家の式楽	『能楽』	11(8)	8月
鉢木問題―あら曲もなや放談の人々	〃	11(10)	10月
時代の推移と家元制度	〃	12(1)	大正3年1月
宝生九郎論猿楽師中唯一人	〃	12(3)	3月
目黒漫話(二)	〃	12(7)	7月
巻頭の辞雪鳥君の「能楽」経営と予の希望	〃	12(10)	10月
欧州戦争より得たる能楽の教訓	〃	12(12)	12月
桜間左陣と水谷縫次	〃	13(1)	大正4年1月
山崎楽堂君に答ふ―洋楽の見本棒振について	〃	13(2)	2月
謡曲新作論	〃	13(4,5)	4,5月
能楽改良と時代変化―池内氏に陳謝するの書	〃	13(7,8)	7,8月
五節舞と国栖魚	〃	13(11)	11月
謡曲白楽天は傑作なり	〃	14(1)	大正5年1月
夕日雑話	〃	14(9)	9月
中将姫と当麻寺の疑問	〃	15(1)	大正6年1月

出版元：『能楽』1(1)～11(2) 能楽館・11(3)～18(4) 能楽発行所、『史海』経済雑誌社、
『八絃』立教学校内文学会、『早稲田文学(第2次)』金尾文淵堂、『やまと新聞』やまと新聞社、
『中央公論』反省社、『能楽画報』能楽通信社、『能楽講義』能楽図書研究会

注

- 1 「久米邦武の能楽研究」〔『能苑逍遙』下巻「能の歴史を歩く」(大阪リールブル一九、大阪大学出版会、一九九八年)二三九ページ〕。なお「久米邦武の能楽研究」初出は『芸能史研究』(一一八号、一九九二年)。
- 2 『久米邦武歴史著作集』別巻『久米邦武の研究』(吉川弘文館、一九九一年)所収。
- 3 「能楽」は芝能楽堂とその運営母体・能楽社が設立された一八八一年以降に普及した言葉であるが、本稿では便宜上、それ以前の能・狂言についても「能楽」を用いた。
- 4 『武蔵野大学能楽資料センター紀要』一三三号(二〇一二年)四七ページ。拙稿は二〇一一年六月三〇日開催の能楽資料センター公開講座の同タイトルの記録を改訂・補筆したものの。
- 5 引用文は新日本古典文学大系 明治編『海外見聞録』(岩波書店、二〇〇九年)三一二ページ。
- 6 オペラ座の場所は前掲(注5)の三一二ページに載る注三による。
- 7 成島柳北に関しては、竹本裕一「久米邦武と能楽復興」〔『幕末・明治期の国民国家形成と文化受容』(新曜社、一九九五年)〕を参照した。
- 8 能楽会、一九二六年発行、四二〜四三三ページ。
- 9 前掲(注4)。
- 10 久米邦武「岩倉具視(三)」〔『やまと新聞』一九一〇年二月一日(三日号)一ページ〕。
- 11 前掲(注4)四七ページ。
- 12 松沢裕作『重野安禪と久米邦武―「正史」を夢みた歴史家』(日本史リブレット八二)、山川出版社、二〇一二年)二五ページ。
- 13 引用文は久米邦武編・田中影校注『岩倉全権大使・米欧回覧実記』三巻(岩波書店、一九七九年)三一四ページ。
- 14 前掲(注7)には、久米が「成島柳北ら演劇に造詣の深い当時の知識人の影響や岩倉具視ら元来の愛好家の影響を受け」たということが書かれているが、その根拠のひとつに、久米が「米欧回覧の旅のなかでオペラを観たという記述が『米欧回覧実記』にはなく」と記しており、これは誤りである。
- 15 久米美術館蔵の『実記』草稿を丹念に整理した高田誠二氏の教示による。
- 16 「能楽文学研究会記事」〔『能楽』一九〇四年二月号〕三三三〜三八ページ。
- 17 前掲(注13)三八〜四〇ページ、六五〜六六ページ、一〇〇〜一〇七ページ。
- 18 前掲(注7)四九九ページ。
- 19 「能楽文学研究会」〔『能楽』一九〇四年二月号〕三九ページ。
- 20 「能楽の過去と将来」〔『能楽』一九一一年七月号〕。引用文はこれを再録した『久米邦武歴史著作集 第五巻』(吉川弘

- 21 文館、一九九一年）八一ページ。
九五ページ。
- 22 前掲（注4）四四～四五ページ。
石井八萬次郎・川副博筆記編修『久米博士 九十周年回顧録』（早稲田大学出版部、一九三四年）。引用文は復刻版（宗高書房、一九八五年）五四六ページ。
- 23 前掲（注2）（注1）参照。
- 24 その記録は「能楽の源流及び変遷の一斑」（『能楽』一九〇五年三月号、二九～三三ページ）にまとめられている。九五ページ。
- 25 「小歌と段物」（『能楽』一九〇六年八月号～一〇月号に連載）。引用文は『久米邦武歴史著作集』第五卷（吉川弘文館、一九九一年）一〇九ページ。
- 26 『能楽』一九〇七年六月号～九月号に連載。
引用文は『久米邦武歴史著作集』第五卷（吉川弘文館、一九九一年）二〇一ページ。
- 27 28